



小さな「ありがとう」が私を変えた



国籍	インドネシア
職種	介護
実習実施者	社会福祉法人真誠 会ピースポート
監理団体	医療社会福祉事業 協同組合

アデリア マシャ プトリ サハラニ
ADELIA MASYA PUTRI SAHARANI

私が技能実習生として来日した時、一番不安だったことは日本語でした。教科書で文法を熟に勉強しても、実際の場では頭が真っ白になってしまいます。利用者様と話す時も、「間違えたらどうしよう」という恐怖が先立ち、自信を持って話せませんでした。

特に、実習が始まったばかりの頃の私は、言葉の壁による孤独を感じていました。家族も友人も遠くにいて、周りから聞こえてくる速すぎる日本語に戸惑い、「自分にはこの仕事は無理かもしれない」と、独りで悩み、落ち込む毎日でした。

そんなある日の仕事終わりのことです。その日は介助が上手いかず、自分の未熟さに自信をなくしていました。重い足取りで更衣室へ向かおうとした時、一人の利用者様が私を呼び止めました。その方は、私のたどたどしい日本語をいつも静かに、優しく聞いてくださる方でした。その方が私の目をじっと見つめ、「いつも一生懸命頑張っているね。ありがとう」と、温かく私の手を握って言ってくださったのです。

それは短い一言でしたが、凍えていた私の心に深く染み渡りました。その時、私は初めて

「完璧じゃなくてもいいんだ」と救われた気持ちになりました。私はずっと「正しい日本語で完璧に介助しないといけない」と考えていました。しかし、本当に大切なのは上手な言葉ではなく、相手を思いやり「心を通わせたい」という熱意なのだと気づかされました。

この経験を通して、私は日本人の「心の温かさ」に深く感銘を受けました。日本の方々は言葉が不自由な外国人に対しても、決して見放すことなく、歩み寄って理解しようとしてくれます。駅で道に迷った時に親身になって教えてくれた通りすがりの人や、仕事で失敗した時に「大丈夫だよ」と背中を押してくれた先輩。外国人である私を「一人の人間」として大切に、温かく受け入れてくれる日本人の優しさと、他者を思いやる深い配慮の心に何度も救われました。

実習生として生活していると、大変なことはたくさんあります。しかし、その経験があるからこそ、私は相手の気持ちに寄り添うことの尊さを学びました。人は一人では生きていけません。誰かの優しさに支えられ、また誰かを支えながら、少しずつ前へ進んでいくのだと思います。

私は将来、日本で学んだ介護の技術と、日本で受け取ったこの温かい心を母国に持ち帰りたいです。言葉や文化の違いを怖がるのではなく、お互いに歩み寄り、笑顔で支え合える社会を築くために、日本とインドネシアの架け橋として貢献していきたいと強く願っています。